

第18回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「竜の子」

徳島県立富岡東高等学校二年 藤川 諒子



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞

『毒の子』

徳島県立富岡東高等学校一年 藤川諒子

体が軽い。

起きてすぐに、ケイタはそのことに気が付き、驚いた。

何しろ昨夜はひどい熱でうなされていたのだ。加えて激しい頭痛がして、起き上がるがれないほどだったのに、今はむしろいつも以上に元気だった。まだ日も昇つておらず、家の中は薄暗い。窓の外は夜中の真っ黒い闇ではなく、朝特有の青い闇が占めている。玄関の開け放たれた戸からは清涼な空気が流れてきていた。この里では、風通しをよくするために口は開いているのが常だ。

ぽんやりと窓の外を眺めているケイタの前を、音もなく、一つの影が通りすぎた。影はそのまま玄関に向かい、出ていこうとする。

「カズ！ ど、行くんだ！」

ケイタが慌てて呼び止めると、影は立ち止まり、振り返った。

「兄ちゃん？」

ケイタはカズのそばに走り寄った。

「大丈夫か？ 熱は下がった？」

「下がったみたい。なんだかすく体が軽いんだ」

カズも昨夜はうなされていたはずだった。しかし、確かに元気そうである。ケイタはほっと胸をなで下ろした。

「ど、」に行こうとしていたんだ？」

ケイタはそう尋ね、それと同時に気が付いた。自分自身、ある場所に強く引かれている。きっとカズも同じだ。

「……竜の山に。なんでだらう？ 呼ばれてる気がするんだ。行かなくちや、つて思つて」

カズは自分でも不思議そうに答えた。ケイタも不思議だった。今まで一度もあの山に登りたいなんて思つたことはないのに、今は山に行くことがとて





も自然で、当然の」とのよひに思ふ。そして、「の思ひを衆と共有しているところ」とも不思議だつた。

「ほくもなんだ。なんだか竜の山に行かなくちゃいけない、ところへ氣に入る」

「兄ちゃんも?」

二人で顔を見合させて笑つた。

ケイタは弟の手を握り、歩き出した。

「行こう」

ケイタとカズが住む竜の里は、竜の山に近い。竜の山にはその名の通り竜が住んでゐるが、その山頂付近には常に雲が立ち込めており、普段は竜の姿を見る」とはない。

「今夜は満月だね」

カズが嬉しそうに叫つた。

いつの間にか東の空が白み始めており、西の空ではほとんど真ん丸に近い月が白い光を放つてゐる。ケイタには満月と何う変わりなく見えるが、厳密にはわずかに欠けてゐるし、今夜満月となる。

今日はよく晴れてゐるから、満月がきれいに見えるだらう。しかし、カズが嬉しそうなのは満月だからとこゝうだけではない。

「竜の天駆けが見られるね」

そう、カズが楽しみにしてゐるのは、竜の天駆けである。竜の山に住む竜は、満月の夜になると、竜の子を連れて空に昇つてゐる。夜空に白く輝く竜と竜の子はとても美しく、これらが空を駆けるようすを竜の天駆けと呼ぶ。

いつもは早寝な里の人々も満月の田ばかりは起きていて、竜の天駆けを見ている。ケイタもこれまで何度も見てきたが、その幻想的な美しさにはいつも息をのむのだ。

竜の天駆けのことを考えて、自然ケイタの頬も緩んできた。カズがケイタを見上げて、ふふっと笑つた。

「楽しみだね」

「そうだな」



カズはつないだ手を嬉しそうに「ふんふん」と振った。しかし、ふと手を振るのを止めて、言った。

「ほんやは山の山に行つて、何がしたいんだのうね？」

「……まあ~」

ケイタは首をかしげた。カズも隣で兄のまねをして首をかたむける。それを見て、ケイタは思わず笑つてしまつた。

「でも、行きたい、行かなくちゃいけない、って思つだろ?」

「うん!」

カズが元気よく答えた。ケイタも心の中でうん、とうなずく。さつきの質問はカズに対するものであると同時に、自分に再確認するものでもあつたのだ。

「……だから、行こう!」

「うん!」

またカズが手を振り始めた。

もうすぐのところに竜の山は迫つていた。

空には雲一つないのに、竜の山の頂上付近はあいかわらず濃厚な雲に覆おおわれていた。

山のふもとに着いた二人は、迷いなく山を登り始めた。どうしようもなく登りたいと思うのだ。登らなければならぬ、と。

山登りは大変なことのはずだが、二人は子どもとは思えない速さで山を登つていつた。

ケイタは不思議だつた。ちつとも足が疲れないのだ。足だけではない。病み上がりだといふのに、少しも疲れを感じない。カズも同じようで、かなり登つたはずなのにまだ元気で、軽い足取りで歩いている。やがて、うつすらと霧が漂い始めた。足元から静かに忍びよつてきたそれは、進むにつれて濃くなり、しづらべると視界は真っ白になつた。兄弟は手を強く握り直して、はぐれなじように、軽いひばなじように、慎重に一步一歩進んでいつた。

「これは、あの雲の中なのか……?」



ケイタは龍の山の頂上付近をいつも覆つて居る雲を思い出した。そうだとすれば、山頂は近い。

「兄ちゃん？ こるよね？」
カズが不安そうに言った。

「いるよ」

ケイタは左手にぎゅっと力を込めた。ケイタは左手でカズの右手を握つているから、カズはケイタの ひだりどなり 左隣ひだりとなり を歩いているはずなのだが、すぐ隣のカズの姿が見えないほど霧は濃密になつていた。

もう引き返そう。

そうささやく声がする。それは自分の心の声で、ケイタはその声に従つた。いと思う。

しかし、どうにもこの先に引き付けられる。どうしても進まなければならないと感じる。引き返そう、とささやく声を打ち消す大音声で、行かなければ！ と叫ぶ自分がいるのだ。

カズも不安がりはするものの、帰ろうとは言わない。きっとカズも感じているのだ。この先に行かなければならぬ、と。

兄弟はゆっくりと、しかし確かに進んでいった。

突然、ぱつと視界が開けた。霧が晴れたのだ。

田の前に広がる光景に、ケイタは口を開いたまま固まつた。

そこには龍がいた。里で一番大きい長老の家よりも大きい。龍は真っ白なうろこをまとい、少し発光しているように見えた。長い体をらせん状に巻いて、目を閉じ、眠つているようだ。

龍の周りには数えきれないほどの人がいた。走り回つたり、ふりふりと歩いたり、しゃがみこんで足元を見つめたり、とみんな思い思いに廻廻していり。

ケイタはその人たちに少し違和感を感じた。しばらくその原因がわからなかつたが、じつと人々の様子を眺めるうちに気が付いた。大人と呼ばれる年齢の人が極端に少ないのだ。ほとんどがお年寄りと小さな子どもで、中にはまだ生まれたてのような赤ん坊もいた。

「またか」



低い、しゃがれた声が聞こえた。ケイタは身を固くした。竜が目を開けている。竜の瞳は透き通った紫色で、ケイタは吸い込まれるようにその瞳に見入った。

「またこんな幼い子が……。兄弟か？」

「は、はい」

緊張して声が上ずつた。

竜は大きくため息をついた。

「最近は病が流行っているから、死人が多いな。早くおさまってほしいものだ」

「……し、死人？」

ケイタが尋ねると、竜は目を大きく見開いて、それから目を伏せた。

「ああ、気付いていないのか」

竜は目を上げ、ケイタとカズを順に見て、言つた。

「お前たちは死んだんだよ」

ケイタは竜の言ったことが信じられなかつた。隣のカズは不思議そうな顔をしている。幼いカズには、ケイタ以上に、竜の言つていることが理解できないらしい。

「信じられないのも無理はない。しかし本当だよ。こゝは死者が来る場だ。わたしは死者の魂を天に送り届ける役目を負つてゐる。死者をこゝに呼び、満月の夜に天へとお返しするのだ」

ケイタは竜の言つているのが、竜の天駆けのことだとわかつた。満月の夜、竜は死者の魂を天に送つていたのだ。あの無数の光は、竜の子と呼んでいたあの光は、死者の魂だつたのだ。

竜は、偶然とするケイタに哀れみの目を向けた。

「人はこの世に生を受け、地上で過ごし、死ねば天へと帰る。天へと帰つた魂は、再び新たな生命としてこの世に生を受けれる。そうして生命は巡つているのだ。一度天へ帰るだけなのだから、何も恐れることはない」

カズがケイタの手を引っ張つた。いつの間にか竜から隠れるようにケイタの後ろに引っ込んでいたカズは、「こわい」とケイタに小さな声で訴えた。ケイタはカズと向き合い、膝を折つてカズと顔の高さを合わせると、そつとカズの両手を取つた。



「大丈夫だよ。兄ちゃんも一緒に」という声が聞かせられた。

「大丈夫。恐くない。

「こつくりとうなずいたカズをケイタはぎゅっと抱きしめた。

「おい、お前」

竜が言った。

ケイタはカズから身を離し、竜を見つめた。カズもケイタの隣に並ぶ。もう兄の体に隠れてはいない。

竜は驚いたような顔をしていた。

「その、兄の方だ。お前は、まだ死んでいないな?」

「死んでいない?」

ケイタは自分の体に目を落とした。自分ではもちろん死んでいるようには感じない。足もついているし、透けてもいない。それはカズを見ても同じで、生きている人と変わりなく見える。

「お前はまだ死んでいない。頭の先から糸のようなものが出ている。それが身体からだと魂をつないでいて、死ぬとそれが切れて魂が身体から離れてしまうんだ。しかしお前は——」

「糸?」

ケイタは頭を触った。しかし、糸のような感触はない。

「あるよ。糸」

カズが背伸びしてケイタの頭の上を指差して言った。

「ずっと向こうにつながってる」

カズはそのまま来た道の方に指を動かした。カズの指の動きを目で追うと、そこには確かに細い糸のようなものがあった。

「お前はまだ生きている。この糸を伝つていけば身体に帰れるだろ?。……お前は竜の里の者だな?」

「は、はい」

竜は、やはりな、と苦い顔をしてうなずいた。

「竜の里はいの山に近いから、死んでいなくても弱っている者を引き寄せてしまつ」とあるんだ。こゝは力が強いから、身体と魂の結びつきが弱まつ



ていれば、魂は身体から離れて「」へ引き寄せられてしまつ。特に「」もは
魂が身体にしつかり定着していないから離れやすいんだ」

竜の話に聞き入つていたケイタは、はつと一つの「」とに思い至つた。
「ぼくは生きている。では――

「カ、カズは?」

「弟の方は死んでいるな」

「そんな……」

ケイタは絶望感に包まれた。

「……カ、カズが死んでるんなら、ぼくも」のまま一緒に死ぬや」

「ダメだよ兄ちゃん。そんなこと」

「カズ……?」

カズは笑つていた。

「ぼくはさ、一人でも大丈夫だよ。兄ちゃんはまだ生きているんだから、ち
ゃんと生きなくちゃ。ぼくのために死ぬなんて無しだよ」

「カズのために……? 違うよ。ぼくが一人じゃ生きられないんだ。カズが
いなくなつたら一人になつちゃうじゃないか!」

ケイタは叫んだ。

「何でぼくから何もかもうぼうんだ! 父さんも! 母さんも! その上カ
ズまでいなくなつたら、ぼくはどうすればいいんだ!」

はあつ、とケイタは荒く息をついた。高ぶつた感情が少しづつ冷め、いく
らか落ち着きを取り戻したケイタは、カズを見てはつとした。

どうしてカズが笑つているなんて思ったのだろう。

カズの顔は苦しそうで、悲しそうで、笑顔を作ろうと無理やりに上げられ
た口角が痛々しかつた。弟にこんな顔をさせるなんて、とケイタは自分がイ
ヤになつた。カズがつらくないはずがない。死んでしまつて、これから天に
昇るのだと聞いて、恐くないはずがないのだ。ケイタ自身、恐いと思ったの
ではなかつたか。カズだつて「」わい」と言ってケイタにしがみついてきた
ではないか。

「ぼくは、ダメな兄ちゃんだな……。」あんな、カズ。一緒には行かない。
「ぼくは帰つて精いっぱい生きるよ」



涙が流れないのは、やはり魂だけの存在だからなのだろう。胸は痛むのに、涙は「じんでも」ない。

「うん。がんばって、兄ちゃん。……さよなら」

兄弟そろってひどい泣き顔だった。しかし、そこに涙は一滴も流れない。

「さよなら、カズ」

兄弟は最後の抱擁^{ほつよつ}を交わした。

そして、兄だけが山を下り始めた。

「ケイタ……。ケイタ！」

重いまぶたを持ち上げると、田の前に老女の顔があつた。明らかにほつとした様子の老女の周りにじやどやと見知った顔が現れる。里の人たちだ。いずれも安心したような顔をしている。

「……長老様」

「いいんだよ、無理にしゃべらなくて。のど乾いてないかい？ 誰か！ 水を！」

長老と呼ばれた老女は、ケイタの答えも聞かずに水を持つてこさせる。左右から支えられながら身体を起したケイタは、ゆっくりと椀に入った水を飲み干した。

「それでね、ケイタ。カズは……」

長老がそう言いかけたそのとき、ふと部屋に灯りが灯されていることに気が付いた。はっと窓の外を見ると、すでに暗い。

「……もう夜なの？」

尋ねる声が震えた。

「ああ、本當だ。口が暮れてるね」

長老が外を見て答えた。そのあとふつと田を伏せ、苦しそうに顔をゆがめた。

「それでね、カズは」

「知ってるよ」

長老がはつと顔を上げた。

「ケイタ！」



賢治のまちから

高校生☆童話大賞

ケイタは立ち上がろうとしていた。周囲の人々が慌ててそばに寄り、ケイタを支えた。ケイタは体の重さに驚いていた。まるで自由に動かない。まだ熱があるらしく、頭も痛む。

それでも、ケイタは何とか立ち上がり、玄関へと向かった。何人もに助けられながら足をひきずるように歩き、ようやく外に出たときには額に汗が浮かんでいた。

ケイタは暗闇の中、顔を仰向あおむけた。そこには砂をちりばめたような満天の星があった。の中に満月を見つけ、ケイタはじっと視線を定めた。

「……カズは、死んだんだよね」

「ああ」

長老も空を仰ぎ、そつと家の壁にもたれかかった。ケイタは両脇を里の人たちに支えられたまま、震える足でどうにか立っている。「ケイタもカズも、昼夜が近づいても煙に出てこないから、心配になつて様子を見に来てみれば、二人とも寝込んでいるんだから驚いたよ。カズは、そのときには、もう……」

悔やむように長老は言った。その瞳に涙が光る。

「……でも、ケイタだけでも助かって良かつた。みんな心配していたんだ。……本当に、良かつた」

ケイタは改めて周りを見た。長老を始め、里の人たちが大勢ケイタの周りに集まっている。みんな一様にケイタを心配そうに見つめていた。

「あ……」

ケイタが口を開いたそのとき、辺りがパアッと明るくなつた。顔を上げると、竜の山から竜と竜の子が昇り始めたところだつた。一直線に昇る竜と、その周囲をふわふわと漂つように付いていく竜の子。竜と竜の子は星の光がかすむほど眩まばゆく、白く輝きながら、どんどん高みへと昇つていいく。

「……カズ」

ケイタは頬ほおを熱いものが伝うのを感じた。

「ぼくは、一人じゃあなかつたよ……」

周囲ですすり泣く声が聞こえた。みんな、カズの死を悼いたんでいるのだった。

「カズ、さよなら」

賢治のまちから

高校生☆童話大賞



龍は龍の子と共に光の尾を引いて、天を駆けていった。